青春の旅

　１９８９年５月、２４歳の私は薄曇りのヒースロー空港に降り立った。『地の果てまで』というキリスト教の新聞を発行している団体が主催するイギリスホームステイ語学留学の旅に応募した。滞在先はブリストルとマンチェスターから選べたが、私はブリストルを選んだ。
　マカイラというかわいらしい３歳の女の子がいる若いカップルのご家庭にホームステイしながら、平日は語学学校に通い、週末は家族で教会の日曜礼拝に出席したり、近くの観光地に連れて行ってもらったりして過ごした。
　ホストマザー、といっても私よりも３歳年上なだけのタニアは専業主婦で、毎朝マカイラを抱っこして、玄関先まで語学学校に通う私を見送ってくれた。ホストファーザーのジョンはタニアと同い年で、近くの日本企業に技術者として勤務していた。家の中ではジョンが１番早起きで、朝ご飯のトーストとコーヒー、ミルクやシリアルなどの朝食の準備をしてくれ、私がそれを食べ始めたころに出勤して行った。その後タニアとマカイラが起きてきて私と一緒に朝食をいただいた。ブリストルは市の中心部に世界最古のメソジスト教会があり、その近くに私の通う語学学校があった。ホームステイ先の家は、郊外にあったので、毎朝バスで通学した。語学学校の生徒たちは、世界中から集められていて、スイス、エジプト、中近東など肌の色や人種もさまざまであった。一人だけ日本人の子がいて、同年代なこともあり、すぐに仲良くなった。その女の子千絵さんは１年前からその語学学校に通っており、すでに英語はペラペラだった。私は１か月の予定であったが、滞在中ほとんど千絵さんとばかり話していたため、結局あまり英語が身につかないまま、終わってしまった。千絵さんは久しぶりに会った日本人の私と話すのが楽しいとのことであった。
　千絵さんは結婚も考えていた彼氏と破局したばかりで、一緒にブリストルの街中を歩いているとき、ふと涙ぐむ時があった。日本ではキリスト教系の女子大を卒業したこともあり、聖書の知識があり、英語の聖書を購入し、読み始めたばかりであった。しかし、英語の聖書は理解できても、微妙なニュアンスが伝わらず、日本語の聖書が欲しいと言っていた。私は恋愛経験が皆無で、なかなか千絵さんの気持ちに寄り添うようなことが言えなかった。しかし、心の中で千絵さんがキリストに会い、心が救われるように祈っていた。私はクリスチャンだった祖母から、小学生の時にもらった口語訳の聖書を日本から持ってきていた。最後の日に空港まで見送りに来てくれていた千絵さんに、別れ際にその聖書を渡すことができた。
　それから３６年が経過した。あの聖書は今、どうなっているのかは知る由もない。しかし、あの時、聖書を必要としていた人にタイムリーに聖書を渡すことができた。神の言葉である聖書がきっと千絵さんを助け、導いてくれたと信じている。